

「夢とロマンを追い求めて　彫刻家 圓鍰勝三」

「芸術の場合、『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし、広く、無限である。ここが芸術の面白いところでもある。」

これは、多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となった圓鍰さんの、七十歳を越えた頃の言葉です。

圓鍰さんは若い頃から、作ろうとする作品によって、どの素材を使うかを決めました。当時は、多くの彫刻家たちがそれぞれに専門の素材を決めていて、専門の素材以外での作品づくりはするな、芸術は一筋道であるのがよいと言われていた時代でした。しかし、圓鍰さんは主流とする木彫以外にも、ブロンズ、セメント、樹脂、陶器など、さまざまな素材を使った作品作りや、ブロンズと金属、ブロンズとガラスといった材質の異なるものを組み合わせた作品作りにも挑戦していきました。そんな作品づくりをする圓鍰さんに対して、まわりの人たちから「八百屋みたいだ。デパートみたいだ。」と⁽¹⁾揶揄^{やゆ}されるなど、非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし、圓鍰さんはそうした非難にも負けずに、信念をもって作品の創作を続けました。

昭和四十九年、東京にある池上本門寺^{いけがみほんもんじ}から山門（仁王門）に据^すえる仁王像の制作依頼の話がありました。仁王像とは、仁王立ちと言って、どちらから押しても引っ張っても動かない、両足を平行に踏ん張っていかにも強そうな形をしたもので、邪鬼を払い仏を守るために、寺の左右の門に一对で置かれます。圓鍰さんは、運慶・快慶による東大寺南大門の仁王像を初め、各地の仁王像を見学したり、さまざまな文献・資料を研究したりして、「仁王の姿はどうあるべきか」を自分なりに模索しました。

圓鍰さんが作品を作るときに一番大切にしたのは、その題材のもつ精神をどのように形に表すかということでした。基本的な約束事を大事にしながらも、既成のものにこだわらず、自分の発想や心を入れて創作していきたいという考えです。ですが、池上本門寺は、七百年前に⁽²⁾日蓮聖人^{にちれんしょうにん}が入滅（臨終）された霊跡であるという長い歴史とさまざまな霊宝をもつ⁽³⁾大本山です。由緒ある寺の沿革からも、空襲で焼失する前にあった仁王像は、二千年も前にも作られた歴史ある像であったことから、寺院側の伝統を重んじる気風が強く感じられました。圓鍰さんは、構想を練るときには何をしていても頭から離れないくらい、くる日もくる日も悩み考える日を過ごしますが、このときはいつもにもましてそういう日が続きました。

構想を練りに練り、いくつもの下図を描いて形を作り、やっと十分の一の小品を作って、

役員全員の納得と賛成を得ました。その後二分の一の原型を作り、依頼から四年後の昭和五十三年、七十三歳のときに、伝統を守りながらも、片方の膝を思い切り上げ、普通は背の後ろに下がっている天衣を頭上に舞い上がらせた従来の基本型とは違った全長三、六メートルの仁王像を完成させました。この躍動感あふれる仁王像は、「仏を守護する憤怒の像であることを本質としながらも、慈悲の心をも内にたたえているように見えてならない」歴史に残る傑作であると言われています。

生涯彫刻作品を創作し続けた圓鏝さんでしたが、母校である河内小学校（現・尾道市立御調西小学校）の校庭の石碑には、晩年圓鏝さんが訪れたときの「積み重ね つみかさね 積み重ねた上にも又積みかさね」という言葉が刻まれています。圓鏝さんが大事にした言葉です。

平成五年には、出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鏝記念館が建てられました。京都での内弟子時代、わずかにもらう小遣いで見に行った⁽⁴⁾帝展や院展に出されている彫刻作品を前に、自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鏝さんの意思を継ぐように、今も多くの人が訪れています。

【注】

- (1) からかうこと。
- (2) 日蓮宗の宗祖。
- (3) 総本山の下にあって、所属の末寺を総轄する寺のこと。
- (4) 帝国美術院展覧会と日本美術院展覧会の略。

【参考文献】

- 圓鏝勝三(1988) 「わが人生」 御調文学 No. 22
- 圓鏝勝三(1989) 「わが人生」 御調文学 No. 23
- 祖田浩一(1991) 「名誉県民小伝集 圓鏝勝三」 中国新聞社